【視察調査報告書】

委 員 会 名	文教経済委員会
委　員　名	【委員】　５名 渡口禎委員長、浜野正太副委員長、大竹利明委員、市川克宏委員、 久保井博美委員
日　　程	令和６年（2024 年）５月 23 日（木）
詳　　細	
視察日及び視察先	八王子市立いずみの森義務教育学校
視 察 内 容	所管事務調査事項「教員の働き方改革について」のいずみの森義務教育学校における地域活動等の取組について
視 察 目 的	本市いずみの森義務教育学校は、令和２年度に本市初の義務教育学校として開校し、１年生から９年生の施設一体型校舎に、子安保育園いずみの森分園、子安学童保育所いずみの森クラブを併設しているほか、学校と地域の交流の場として、地域コミュニティ・スペースを設けた学校である。 本校では、学校運営協議会と具体的な事案を担ういずみの森地域協働本部の２つが連携しており、例えば、夏休みの学習支援や校外活動などにおいて、教員の人手が必要になった際には、協働本部において、人員を確保するなど柔軟に対応できるよう協力体制が整備されていることから、教員の負担感軽減に貢献していることに加え、子どもの教育環境の充実にも寄与している本取組は、市内においても先進的な取組である。 以上から、本市における学校、地域及び保護者との連携状況等を学び、今後、本テーマの提言を作成していくための参考にするため、現場視察を実施した。
委員長所感 （意見・課題・本市への反映など）	●渡口禎委員長 視察では、学校長、副校長そして、学校運営協議会会長からお話しを伺うことができ、大変に興味深い視察となった。 特に教職員と学校コーディネーター、そして学校運営協議会が、常に連携が取れており、情報の共有化が図られている点は大変素晴らしかった。 教職員が人手不足などの学校における課題をスムーズに学校運営協議会と地域共同本部の連携を通して相談する仕組み、このような連携が取れるまでには、ご苦労もあったと思うが、本市にとって初めての義務教育学校としての運営を行うため、学校と地域を含めた団結力の強さを感じた。 いずみの森義務教育学校の前身となる第六小学校、第三中学校が隣り合わせの位置関係にあり、地域との繋がりにおいて共通する背景が多かったことがその後の地域との連携においても、大いに生かされていることも改めて感じた。 サマーフェスティバルや南口マルシェへの連携などにおいても、常に地域の子どもたちに何か楽しめるものはないか、という思いが地域の大人にしっかり受け継がれているとも感じた。 地域との連携は、少なからず「教員の働き方改革」の一翼を担っている事が

	実感できる視察となり、本市のモデル校として他の学校へもさらに展開をしていただきたいと考える。
委員所感 （意見・課題・本市への反映など）	●浜野正太副委員長 義務教育期間の９年を一つの学校で完結するということで、様々な新しい取組をお教えいただいた。統括校長１名に対して、複数名の副校長がいることで管理職の負担が分散させることができているということや、かねてより地域の方々との連携をとりながら先生たちが仕事の中心である授業や授業準備に専念できるよう工夫をされているということであった。 地域の方々との連携という点について、「いずみの森地域協働本部」を設置しており、先生方と家庭、地域の方々が知恵を出し合い子どもを支えているということであった。９学年 39 学級を擁する大規模校であるので、地域の方々が多くいらっしゃるのだろうかと思っていたが、密にコミュニケーションをとることによる結果であると感じた。 また、児童・生徒を９年間一貫して支える場として、保護者や地域の方々、そして先生方にとっても、６年や３年で区切りとすることなく、連続して子ども達と接することができることのメリットを感じることができた。 ●大竹利明委員 いずみの森義務教育学校における教員の働き方改革について校長、副校長、学校運営協議会会長からお話しをいただいた。 いずみの森地域協働本部では、教育支援ボランティア部の中に人材バンク部・学習支援部・教育環境部・行事部そして庶務会計部と分かれている中で、まさに教員と協働で運営をされ、そしてそれが効果的に機能をしていることで、教員の多忙化防止に繋がっていることを学ばせていただいた。 業務の割り振りを５名の学校コーディネーターが中心に担っており様々な点と点を繋げるためにも肝心だと感じるとともに、具体的な業務でいえば学習支援に関しては漢検・英検等の監督を協働本部で人員を出していただけるのは、教員が休日業務で助かっていること、教育環境でいえば装飾をはじめとした図書館支援、地元駅前委員会との協働活動、防災教室支援といった行事の支援などこうしたことが地域と教員の協働なのだと感じ、教員の働き方改革に寄与するのと同時に教員の精神的にも地域と繋がっていることを強く感じられ、やりがいにも繋がっていることを現場の声としていただいた。 学校と家庭と地域を結ぶコミュニティカレンダーの作成は、地域がより学校で何が行われるのかすぐにわかることができ、持続可能な地域づくりにも寄与できる取組だと感じた。 ●市川克宏委員 視察を通して感じたことは、教職員にとって「地域に支えられていることに、自分たちの働き甲斐になっている」という趣旨の発言にも示されているように、学校運営協議会と地域共同本部の連携と協力の深さであった。地域で学校を支援していくことが強調されながらも、地域的な偏在や人材不足など目指す目標に至る取組に展望が見えない面があった。しかし、いずみの森義務教育学

校の取組を学ぶなかで、その可能性を感じることができた。この取組を全市的に共有し生かせないだろうかと強く感じた。後継者づくりの課題はあるが、「サマーフェスティバル」による卒業生や地域保護者の大きな同窓会の取組は地域と学校の絆をさらに深め、後継者づくりにも寄与するものだと思う。「教員の働き方改革」にとどまらず、地域と学校との新しい関係、また新しいまちづくりに大きな問題提起とヒントを感じる視察だった。

●久保井博美委員

いずみの森義務教育学校は、令和２年の開校時からコミュニティスクールとして、学運協とは別の協働本部の組織づくりがされており、学運協で協議されたことを実行するための実行部隊として、地域と連携して活動が行われている。この組織の活動が活発に実行できるのは、組織の構成メンバーとして関わっている町会・自治会はじめ、青少対、民生委員、そして、現役ＰＴＡだけでなく元ＰＴＡのＯＢなどのそれぞれの団体が、横のつながりを持っているという背景があることが大きいと感じた。そのことによって、地域人材の発見がスピーディーになるからである。

また学校側も、日々の子どもたちの豊かな学びのため、安全な環境の保持などに、「地域の力」を発揮していただけることは、学校にとっても大きなメリットであると実感しておられ、教員の働き方改革にもつながっていると感じた。

よい事例として、他のコミュニティスクールへも紹介し、共有していただきたい取組だと思った。

視察の様子